様々な形で支援活動

活動先で見えてくる被災者の悲しみと不安

東北教区災害ボランティアセンターを追う

東日本大震災発生から2カ月。東北教区災害ボランティアセンターには連日、僧侶や門信徒、一般市民らが登録し、復興支援活動に加わっている。毎日10～30人程度のボランティアが活動し、繰り返し参加する人もいるなど支援の輪は広がりを見せる。必要とされる支援が日々変わる中、被災者の目線に立った、長期的・継続的な視点と物心両面での細やかなケアが一層必要とされている。同センターに登録したボランティアに同行し、取材した。

「どんな支援もありがたい」

食材持ち込み炊き出し

同センターには支援物資とともに食材や調理器具を持ち込み、避難所で炊き出しを行うグループも多い。

高岡教区五位組（織田隆夫組長）は4月26日、僧侶や門徒推進員らで構成する災害ボランティアの第1次隊として、仙台市若林区・六郷中学校を訪れ、うどん320食と富山名物のかまぼこなどを振る舞った（写真）。

一人で避難している女性(73)は「家は津波で土砂が入り、室内は散乱状態。家財も運び出せず、身の回りにあるのはすべて支援物資。集団生活は不便だが、仮設住宅に移るにしても長年付き合ってきた近所の人と一緒にいたいし、生まれ育った土地を離れたくない。温かい食事の喜びとともに、これからの不安を強く感じる」と話す。

また、子ども2人が避難所の体育館から同中学に通う母親は「受験生の長男が勉強に集中できる環境を作ってあげたい。見通しが立たない生活が続くと不平不満も出てくる」とうつむいた。

北海道震災支援ネットのメンバーと地元や新潟県の僧侶らは27日、同市宮城野区・専能寺(足利一之住職)の門徒が多く避難する同区・岡田小学校で炊き出し。体育館に身を寄せる300人から拍手で迎えられ、持参したラーメン360食を振る舞った。高齢者には住民が率先して配膳を行うなど協力しながらの炊き出しとなった。

この避難所の本部長を務める黒澤親雄さん（72・同寺門徒）は「被災者のためになるならどんな支援もありがたい。震災当初に比べれば食事の提供も安定し、物資も十分届けていただいているが、仮設住宅への移転など新たな問題も抱えている。余震と津波の危険や仕事の不安など問題は山積しているが、一丸となって対応していきたい」と話し、ボランティアの炊き出しに感謝するとともに不安を口にした。

同日には長野県須坂市・普願寺の寺族と門徒らが若林区・七郷市民センターで手打ちそば50食を振る舞った。

「地域のお寺のシンボルが…」

手作業で鐘楼を解体

同センターは自治体や被災寺院からの要請に応じ、ボランティアが瓦礫（がれき）の撤去や散乱した家屋の片付けなどを行っている。

仙台空港に近い宮城県名取市の明観寺（三浦善詔住職）は鐘楼が倒壊した。「大切な仏具を重機で壊すのは…」と同センターに解体・撤去を依頼した。4月26日にボランティアと同寺門徒が手作業で鐘楼の解体・撤去作業を行った（写真）。

近くに住む相沢美子夫さんは昭和50年に作業員として鐘楼建設に携わった。「正月やお盆には、門徒でない私たちにも声をかけてくださる地域のお寺。そのシンボルが倒れてしまい残念でならない。ぜひ復興して、また鐘を鳴らしてほしい」と涙を浮かべながら作業を見守っていた。

同寺では3月11日の地震発生時は、常例法座のさなかだった。3分近い激しい揺れの中、門徒43人は本堂で身を寄せ合い、三浦住職は内陣のご本尊を守ろうと宮殿（くうでん）を懸命に押さえた。梵鐘が唸（うな）りを上げて横に大きく揺れ、鐘楼はやがて土台から振り落とされるように地響きとともに崩れ落ちたという。

その後、家族を案じて自宅に戻り津波で亡くなった人など、同寺の門徒18人が亡くなり、50軒以上が流失した。坊守の慶子さんは「毎日のように亡くなられたご門徒の知らせが届き、つらかった。お寺で泣かせてほしいと参られたご遺族にかける言葉も見つからない中で、一緒に泣き、お念仏が口からこぼれてくださった時、み教えに救われた思いがした。朝夕に時を知らせ、生活の一部として地域に愛された梵鐘は失ったが、一生この思いを背負って心の依りどころとしてのお寺を守っていきたい」と話した。

また、大津波で甚大な被害を受けた同県石巻市・称法寺（細川雅美住職）には連日、ボランティアが駆け付け、境内の瓦礫の撤去や本堂や庫裏の掃除などを行っている。

細川住職は「これまで10人余りの門徒さんの火葬に立ち会ったが、ライフラインが復旧せず、通信や情報収集の手段がないため、門徒の安否がほとんどつかめていない。被害状況はまったく把握できず、葬儀を執り行う場所もなかった。今は、地域の会館が使えるようになり5月中旬にはようやく合同の葬儀を営むめどが立った。建物の損壊は大きいものの境内の原形が戻りつつあり、この場所で復興を遂げようと前向きになることができた」と話した。4月30日から3日間、本山職員で結成したボランティア20人が同寺周辺の瓦礫の撤去を行った。

ボランティアたちは活動後、同センターでミーティングを行っており、「瓦礫は、瓦礫ではなく被災者にとって大切な物という気持ちで取り組まなければならない」「地元の行政に届ければ、交通費などの補助が受けられる」など、活動者相互の意識や情報の共有を図っている。大阪府河南町から参加した高林寺の葛本徹哉住職は「本当に寄り添う支援とは何か。自分たちが求めに応える手段を持ち合わせているか、常に問いながら継続してかかわっていきたい」と話していた。

同センターは各自治体の要望を聞き、登録するボランティアに情報を提供するほか、避難所で不足している物資の提供、民家や寺院に流入した土砂や瓦礫の撤去、家具の片付けなどのボランティア派遣を行う。また、被災者から情報収集を行い、行政の支援から取り残された人への支援を模索している。

5月1日現在、351人のボランティアが登録している。